

巻頭言

教室で起きていることから学ぶことの大切さ

津久井 貴之(群馬大学)

本学会は、その名の通り、英語の授業そのもの—具体的な実践、指導手順、言語活動のデザインや支援の工夫—を出発点とし、「教室」で起きていることから学び続けてきた学会である。授業現場に立ち返り、子どもたちの学びや変容を丁寧に観察し、それぞれの実践の改善や英語教育学としての研究の発展につなげてきた。まさに「教室」から学び、「教室」に還元するという姿勢を大切に歩んできた歴史がある。

近年、デジタル教科書の普及や生成 AI を活用した個別最適な学びの推進や授業外の学習機会の充実など、教育現場におけるテクノロジーの進展は目覚ましい。だが一方で、英語教師と子どもたちが対面で学び合う、すなわち「教室」という場の価値は、むしろ高まっているのではないかと感じる。テクノロジーによって多くのことができるようになった今だからこそ、その発達だけでは補えない指導や支援、学び合いが確かに「教室」には存在しているのではないだろうか。

では、その最後の最後に残る本質的な部分とは何であろうか。英語教師が先輩英語学習者という立場でロールモデルになるだけではなく、英語という言語のユーザーの一人として子どもたちと英語でやり取りをすること、また、普段の学校生活の中で築かれる信頼関係を土台としたコミュニケーションや教室環境、そして何より、一つひとつのことはや指導・支援に込められた英語教師としての思いや願い—これらは簡単に数値化したり代替したりできるものではない。だからこそ、会員同士で話し合い、子どもたちの表情や教師のふるまい、英語の発問や語りのなかから互いに学び合い、気づきを持ち寄ること。その積み重ねが、これからの授業づくりや研究に生かされていくと信じている。英語の授業中に起きていることを学び続ける英授研の意味や価値は、こうした時代にあってますます高まるはずであり、そうあり続けるために一会員として努力していきたいと考える。

最近、ある学校で、授業中に英語教師が一言も英語を話さない授業を拝見する機会があった。端末上で子どもたちの学びのプロセスを丁寧に見取り、個別支援をしていた。子どもたちは言語活動を通して英語で表現していた。ある意味、英語教師が facilitator に徹した授業、あるいは子ども中心・学習者中心の授業と言えるかもしれない。一方で、そこまで頑なに「支援」のあるべき姿を決めつけず、英語教師自身が生徒の英語に反応し、感じた疑問を投げかけたり、自身の考えを述べたりすることも、大切な「支援」の一つなのではないかと感じた。ふと、「先生はどう思いますか？」と聞いてみたいと思った子どもたちはいなかっただろうか、と考えた。テクノロジーや新しいツールを活用しつつも、やはり「教室」で子どもたちと向き合い、言葉を交わすなかで生まれる学びの価値を、私たちは今一度問い直す必要があるのではないだろうか。

関東支部第28回春季大会報告

●日時：2025年4月13日(日) 9:50~17:00

●会場：神奈川大学横浜キャンパス

●内容：午前の部 総合司会：中島 真紀子(筑波大学附属中学校)

Ⅰ ビデオによる授業研究と協議そのⅠ・高等学校 高校1年生 英語コミュニケーションⅠ

「文学作品を通じた技能統合型の言語活動—創造的思考を伴う短編物語の教材化—」

授業者：松尾 真太郎(筑波大学附属駒場中・高等学校)

司会・分析：中島 利恵子(新島学園中学校・高等学校)

「コミュニケーション重視か、文法重視か。」というのはよくある議論である。今回の授業は、そのような二項対立がいかにか不毛であるかを表した授業であると感じた。「コミュニケーション重視」を表面的に捉えた授業では、日常会話の範疇から抜け出せず、英語の運用能力自体は伸びたとしても、本質的な「学力」に結びついたかは疑問が残る。今回の授業はそのような授業とは対極にあると感じた。文学作品を深く理解し、創作に繋げるといのは、一般的に、日本語でさえ文学に触れる機会が少なくなっている現代の高校生にとっては壮大な知的冒険である。松尾先生は水先案内人として、広大な教養の海へと生徒を送り出しているのだと感じた。我々教育者は松尾先生に見習って、表層的なコミュニケーションではなく、生徒が本質的な教養を身に付ける探究の機会をつくる必要がある。それこそが、真の「コミュニケーション」につながるのだと心から感じた。

(文責 神奈川県立大船高等学校 海鋒 拓也)

2 分科会「教育現場における生成AIの活用と展望」

発表者：豊嶋 正貴(國學院大學他)

豊嶋先生は、生成 AI を実際に教育に活用している教師がそれほど多くない状況に対して、AI を否定するのではなく、AI をうまく使うことにより教師の仕事が減らす可能性があることを提案されました。次期指導要領の全体のキーワードは生成 AI で、それに対して今の問題は AI を使いこなしている教師が少ないことだそうです。とにかく次期指導要領に向けて私達教師は AI を使いこなせるように準備しておく必要があります。今後は AI の教育利用が進み、業者は AI を搭載したサービスを提供してくれるようになるそうです。例えば生徒は AI を使い speaking の練習をしたり、実際に生徒の英語原稿の添削や採点を行ったりすることができるので、それを利用すれば、教師は時間を生み出すことができます。

豊嶋先生はお話の最後に「AI をどう活用していくかを考えなければならない時代にきた。AI をまず教師の業務に取り入れて仕事を減らし、その浮いた時間を使って、これからやってくる教育について考えていくのがいいのではないのでしょうか」というメッセージをいただきました。

(文責 文京区立第十中学校 原田博子)

3 分科会 「中高の先生!小学校の教科書を使ってみませんか?」

発表者:狩野 晶子(上智大学短期大学部)

五十嵐 浩子(国士舘大学)

黒木 愛(筑波大学附属小学校)

本発表は、実際に小学校の教科書を手に取り、気づきや感想をグループで共有するワークショップ形式で行われた。小学校では「聞く・話す」を中心に、チャッツやデジタル教材を活用し、児童がわくわくしながら学べる工夫が随所にあることが確認された。狩野先生からは、小学校で得た英語の「かたまり(チャンク)」を中学校で丁寧に分解して、再構成する術を与えることが重要との指摘があった。また、五十嵐先生は、中学1年の文字指導は時間をかけて丁寧に行い、「写し書き」から「自分で書く」への橋渡しが必要と提言された。そして、黒木先生は、中学校における文法用語の多用が生徒の抵抗感や苦手意識を生む可能性を指摘し、小学校の教科書(歌や登場人物など)の活用を通して、生徒が安心して学べる授業づくりについて提案された。小中接続の重要性を再確認し、小学校の実践を理解した上で中学校の授業を構築する必要性を強く感じた。

(文責 千葉県総合教育センター 吉田和代)

分科会 「学習目標を見据える帯活動を通して話す力を高める指導を考える」

発表者:鈴木 千貴(横浜市立金沢高等学校)

Small Talk をはじめとした帯活動を行う実践が増えている。継続は力なりで定型的に位置づけることや、言語活動として成立させるために道筋や使う言語材料を示しすぎないなどがあるとはいえ、ただやらせるだけでいいのかという議論もよく聞かれる。そこで鈴木先生は、「学習目標」に着目して、有機的に授業の中に位置づけたための tips を非常にわかりやすく示していただいた。ほんの小さな活動でも、Pre-While-Post を教師も生徒も意識して、取り組ませることで確実な積み上げが期待できると改めて感じることであった。ひとえにそれは即興をうみだす工夫の計画性でもあると感じた。

(文責 文教大学 桐井 誠)

分科会 「ペアワークへの生徒の関与を高める実践研究」

発表者:加藤 淳(東京学芸大学附属高等学校、現・桜美林大学)

生徒のペアワークへの「主体的な関与を高める要因」を特定し、より効果的な活動の設計を見据えた実践研究。2 回のアンケートを実施し、学習へのエンゲージメント要因と学習の深化・定着を促す要因を探った。結果は①「鍛えられる」(と感じる)「実践的」(=日常で使える)「定着する」など、メタ的な自己評価の高い活動がペアワークへの主体的な関与を高め、②意味交渉やアウトプットを必要とする活動、ゲーム性が高い活動が生徒から高い評価を得ているとの発表だった。

(文責 東京都市大学付属中学校・高等学校 高橋信博)

4 ビデオによる授業研究と協議その2・中学校

「教科書題材を『自分ごと』として理解し『相手意識』をもって適切に表現する生徒の育成を目指して」

授業者：谷口 友隆（相模原市立大野南中学校）

司会・分析：高橋 一幸（神奈川大学）

教科書の題材を生徒が「自分ごと」として捉えられるよう、事前アンケートを活用した導入の工夫や、教師自身の体験談を交えたオーラルイントロダクションが効果的に使われていました。ペアワークでも「演じる意識」や「言い方」への声掛けにより、生徒が目的をもって取り組んでいた点が印象的です。これらの工夫によって、生徒の学びが「自分ごと」から「相手意識」へ自然に発展しており、全人的な成長を達成できるような深い学びにつながっていました。また、分析者からは主体的で対話的な学びを実現するための「Think-Pair-Share-Teacher's Feedback」のプロセスと、それに伴う教師の即応力（アドリブ）の重要性、そして「伝え方」だけでなく「何を伝えるか」という視点の大切さが指摘されていました。

（文責 城北埼玉中学・高等学校 石橋大輔）

5 シンポジウム

「これからの英語教師に求められる役割とは？-user と learner の視点から考える」

和泉 伸一（上智大学）

津久井 貴之（群馬大学）

本プログラムは、英語教師に求められる役割が何であるか、英語使用者（user）と英語学習者（learner）の視点から展開されていった。津久井先生のご講演は、教員を「教材と生徒」「学習者と使用者」「教室空間」等を繋ぐ役割という話題から始まった。型にはまった指導、そして授業で教師が英語を使用することに必死になって目的を見失っていないだろうか。生徒の主体的な学びを促すために教員が英語学習者、そして、使用者としてどのような視点を持つべきかを考える重要な示唆を得た。

和泉先生のご講演では、教員の「教えたい」「覚えさせたい」という強い気持ちが、生徒の英語使用者と英語学習者の関係を阻害することがあると示唆された。生徒が「使いたい」と思う気持ちを引き出すためにはどうすれば良いのだろうか。その一つとして、教員が英語使用者として生徒のロールモデルになることが示唆された。教員が授業素材を英語使用者の視点で捉え、研究することは必要だ。ただし、英語指導者としての視点も忘れてはいけないという語りは、言語活動について英語使用者の視点からもう一度見直したい視点が示唆された。最後に、コミュニケーションは予測不可能なものであり、予測不可能な部分が豊かになる程コミュニケーションが豊かになること。そして、「間違えたら…」と思っているうちは英語使用がなかなか進まないことも述べられていた。私たち英語教員は、生徒が「英語を使いたい」という気持ちをどのように引き出していけば良いだろうか。新学期の授業のスタートにあたり、「頑張ろう」という気持ちと授業改善の視点を得ることができた講演であった。

（文責 新島学園中学校・高等学校 兼岩明日香）

関西支部第35回春季研究大会報告

●日時:2025年6月22日(日)10:00~17:00

●会場:大阪商業大学

●内容

1. 授業実践紹介と研究協議

■中学校

「教科書本文を使った読む活動(中3)」

発表者:熊上 絵里(枚方市立桜丘中学校)

分析者:菅 正隆(大阪総合保育大学短期大学部、大阪城南女子短期大学)

授業者の熊上先生は、この春、現任校に転勤されたばかり。発表していただいた授業は、3年間の産育休を経て復帰された前任校の枚方市立第三中学校の3年生を対象に、昨年12月に実施されたものである。生徒にとって卒業というゴールも見えてきた時期に、卒業スピーチをテーマとした英語長文(Lesson 6 “Imagine to Act”)を題材に設定された。多数の未修語(注釈付き)を含む350語の長文をまとめて読むことは、生徒には初めての経験である。熊上先生にとっても、敢えて区切らずに全体の概要を把握させる指導は、新たな挑戦とのことである。本時のめあては「スピーチの要点をとらえ、自分の意見を付け加えられる」。ウォーミングアップや帯学習、復習の後、読み取りのポイント(話者の夢は何か、伝えたいことは何か)を提示して、題材の「卒業スピーチ」を読む(1回目:プリント使用)。その後、グループで、配付された絵カードをスピーチ内容に合うように並べて、内容理解を確認する。

その後先生は、教科書のスピーチ内容を易しくリライトした英文と、それを更に短く読み易くした英文の2種類を加えた3段階の難易度差のある教材を「一人一台端末」に配信。生徒は個々が自ら選んだ教材を読み、スピーチの内容について理解を深めた(2回目:タブレット使用)。

2回の読解の後、「もしあなたが話者の友人であれば、どのような言葉をかけるか」という観点から各自の意見を述べ合う活動があり、生徒は、英語と日本語を駆使しながら、がんばって発言しようとしていた。

分析者の菅正隆先生からは、ねらいと構成はよく考えられており、先生の力量の高さを感じられること、その反面、先生の発話スピード、学習活動の過密さなどが生徒に合っていたかについては、丁寧な振り返りと再考が必要であろうとのご助言があった。

熊上先生は、生徒が自ら「選択」する機会を学習のさまざまな場面で設定されているのが印象的であった。生徒に自分で考え選ぶ力をつけさせたい、という先生の強い思いを感じた。

(文責 四天王寺大学 松永 淳子)

■高等学校

「ALTとの対話を生かした授業(英語コミュニケーションII・高2)」

発表者:中野 裕太(神戸市立葺合高等学校)

Dylan Freestone(神戸市立葺合高等学校)

分析者:加藤 京子(愛徳学園高等学校)

宮崎 貴弘(神戸市立葺合高等学校)

はじめに発表者の中野先生から、ALTとの対話を通じて生徒の題材理解を促すことが授業のテーマであること、また教員自身が自己開示を行うことで、生徒がその題材を自分ごととして捉えて、“In the past, what purpose in life did you find during difficult times?”という問いに英語で答えるための支援をおこなった授業である、との説明があった。

導入部分では、T(JLT,ALT)-S ⇔ JLT-ALTと切り替えながら、SVAやカンボジア、アフガニスタンに関する背景知識や言語材料など、豊富なインプットを与えることで、生徒が後の活動に取り組むための準備が整えられていた。展開部分では、ALTによるオーラルイントロダクションの後、生徒が本文を読み、True/Falseによって概要理解を確認した後、リテリングへと進み、最後に先述の問いが提示された。まず、中野先生がモデルとしてご自身の経験を英語で語り、次に、生徒同士が自身の経験を口頭で共有してから、まとめとしてのwriting活動へと自然に授業が展開されていた。

生徒の様子としては、展開部分の序盤、ALTが視覚資料を示しながら状況描写の理解を支援する場面において、ナチュラルなスピードでの発話を集中して聞き取ろうとする姿が、特に印象的であった。中野先生は、生徒の変容について、Dylan先生の英語に多く触れることで聞き取りや理解力の向上を実感していることが、生徒対象のアンケート結果にも表れていると述べられた。また、Dylan先生が繰り返し用いた表現を、生徒が使おうとする傾向も見られることが紹介された。

分析者の宮崎先生からは、同じく分析者の加藤先生の「Team teachingは漫才のように」、「シナリオはあるが、あたかも即興の会話であるかのように反応し合うことで、本物のコミュニケーションを演出する。」という表現の紹介と、内容理解の支援について具体的なご提案があり、加藤先生からは、より効果的に発問を取り入れることで、内容理解を適切に支援できるのではないかというご助言があった。

また、「difficult timesについて語ることには、抵抗を感じる生徒もいるのではないか」とのフロアからの質問に対して、宮崎先生が「英語を介してだからこそ、語れる部分もあるのではないか」とコメントされ、加藤先生が「自己開示の程度については、生徒の意思が尊重されていることを、生徒に伝えることの重要性」を改めて強調される場面もあり、「ALTとの対話を生かす」という今回のテーマから、英語教育全般に関わることまで、幅広く示唆に富むご発表であった。

(文責 大阪府立四條畷高等学校 野田 玲子)

2. 講演

「心を育てる英語教育を目指して—Humanistic Language Teaching 再考—」

講演者：加賀田 哲也（大阪教育大学）

司 会：和田 憲明（姫路大学）

加賀田先生は、「英語教育がいかに児童・生徒の『人格形成』に向けて貢献できるか」を主題とし、Humanistic Language Teaching（人間形成的言語教育）（以下「HLT」という。）の研究を進められている。その中で、HLT を「英語を教えるというプロセスのなかで、確かな英語力・コミュニケーション能力を育成するとともに、自己と他者、社会、世界との関わりを通して、学習者の人間形成に資する教育」と定義するとともに、「英語教育を通じて、児童生徒の豊かな人間性を育み、民主的で平和な多言語・多文化共生社会を構築する」ことを英語教育の目的とすることを提案されている。

本講演では、「在留外国人数」の増加等による「内なる国際化」の進展により、学校教育において、「多様性」「関係性」「共感性」「寛容性」「協働性」「協調性」「レジリエンス（逆境や困難に立ち向かう力）」など、相手を意識した「人間性」を涵養することが不可欠であることや、「言語文化観を育てる」、「題材を自分事とする」、「教室内の温かい人間関係を醸成する」などの、「人間性」を育むための要素についてお話いただいた。さらに、HLT の視点からの活動設計において「自己理解」を特に大切にしたいこととして挙げられ、児童生徒が自己理解を深めたり、他者との関係性を意識したりする活動設計の視点や、小、中、高等学校、さらには大学における実践例を示していただいた。

加賀田先生が最後に語られた『「相手への配慮」を大切に、生きた言葉を交わしながら、人間どうしがつながり合うことの温もりや心地よさが感じられる授業をよりいっそう目指す。』という目標は、AI 等が進展している今こそ、英語教員が持ち続けなければならないものではないだろうか。参加者にとって、授業づくりにおいて、「人間教育」の視点を常に持つことの大切さを改めて認識することができたすばらしいご講演であった。

（文責 大阪府教育庁 松下 信之）

編集後記

次期学習指導要領の改訂に向けての動きが報じられています。いつも次こそ変えたい、変わって欲しいと願うのは、文科省関係者はもちろん、全国の教員の願いでありましょう。不易流行という言葉がありますが、不易と流行の共に大切であると並列であるはずが、時として共に片方が片方を打ち消す場面で使われることもあるように感じます。流行り物にとらわれてばかりではよいのかとか、過去を捨てて刷新しようではありませんかとか……。英語教育界はどうでしょうか。変わるべきものがたくさんあると思います。変わらないで守るものもあります。それらは背反するものではなく、共存するはずです。GIGAスクール構想によるICTの活用、生成AIや自動翻訳の活用、デジタル教科書化などは決して遠ざけてだけはいられないものです。同時に走りすぎて見失うものがないかも常にもう一人の自分として持っていたいものです。本英語授業研究会は常に不易流行の検証を児童、生徒、学生らと共に行っていく存在でありたいと願うものです。

（文教大学 桐井 誠）